

## 7 月例会

# 農業経済学と経済地理学の対話

—山崎亮一 2020 『労働市場の地域特性と農業構造』（筑波書房）をめぐって（合評会）—

対面会場と Zoom を利用したハイフレックス形式での開催となります。

下記Googleフォームで申し込みいただき、ご参加ください。

<https://forms.gle/VnTa1UNoRA11jzDXA> \*2022 年 7 月 21 日（木）17 時締切

**2022 年 7 月 23 日（土） 開会 13 時 30 分 閉会 17 時**

**場所：日本大学経済学部 3 号館 12 階 3121 教室**

**+Zoom を用いたオンライン会議**

発表者・演題：

- ・新井祥穂（東京農工大学）：趣旨説明
- ・山崎亮一（東京農工大学）：『労働市場の地域特性と農業構造』について
- ・山本昌弘（大和大学）：農業経済学における本書の位置付け，その後の論争
- ・中澤高志（明治大学）：地理学における地域労働市場論の到達点，今後の可能性

問い合わせ先：長尾謙吉<E-mail: kanto(at)economicgeography.jp>

(at)を@に変更ください。

# 企画趣旨

地域労働市場は、資本制領域と、農業を含む非資本制領域の接点にあつて、前者から後者への作用が端的に現れる。本書の元となった山崎亮一（1996）『労働市場の地域特性と農業構造』農林統計協会は、農業構造の説明にあたり、地域労働市場の態様を中核に据える方法論を学界に投げかけた、エポックメイキングな書であつた。刊行当時、田代洋一氏により展開されていた地域労働市場—農業構造論の、欠陥を衝く書でもあつた。田代氏は資本がもたらす農村賃金構造の重層性、とりわけその最低位にある「切り売り労賃」層をとらえ、その基礎の上に特殊農村的低賃金構造論、さらに農業部面では兼業滞留構造を導いたが、田代氏の研究以降の日本経済の蓄積構造変化を経て、同書はこれに地域的限定性を付与したのであつた。農業と資本の再生産的連関の有り様を、その段階制を含めて示した点で同書は、山田盛太郎以来の経済学方法論を自覚的に継承し発展させた書である。

2020年秋、同書は山崎亮一著作集第1巻として再刊行された。本例会ではその合評会という形をとり、批判的検討を行いたい。同書刊行以降の日本経済の蓄積構造の転換、新自由主義的労働政策を受けて、同書が定式化した地域労働市場—農業構造論の内実も今日変化しているが（これらは、著作集第2巻に所収）、そこに示された地域労働市場の地域特性を現状認識の出発点に据えることは、依然として有効であるように思われる。さらには、地域労働市場—農業構造論の出発点に立ち返る作業を通じて、資本と労働をめぐる知と方法論を農業経済学と地理学とで共有し、今日課せられている課題を確認することが本企画のねらいである。あるいはまた、理論と方法論の選択にしばしば悩む農業地理学に、一つの筋道を提示することも企図している。

報告では、著者である山崎氏により、本書の内容を開示していただく。その含意や、農業経済学にもたらした反響、残された課題については、ほぼ同じ時期を地域労働市場論からの実証研究を積み重ねてこられ、かつ山崎氏の議論を熟読玩味されてきた、山本昌弘氏にご解説願う。そして経済地理学もまた、「田代的」地域労働市場像を共有し、地域経済や労働者への資本の作用を捉えようと多くの研究者が参画した分野であつた。コメンテーターの中澤氏には、経済地理学における地域労働市場研究の、焦点とその後の展開に基づきながら、本書を批判的に検討していただくようお願いしている。

今日、地域労働市場をめぐる研究状況は、残念ながら「退潮」と表現せざるを得ない。現地調査の困難等、様々な要因はあるが、それは、農業・農村をめぐるのは個別的な政策・実践の詳細なレポート作成で事足りるとし、資本の運動との関連で農業部面・地域社会を捉えるという問題意識自体が減退していることの、現れのようにみえてならない。本例会が、こうした研究状況に危機感を感じる会員の、次なる活動の動機となれば幸いである。